

卒業時に身につけてほしい能力(卒業生の特性)分析 2020 年度

※各質問について「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」を合わせた結果を前年度と比較した。

1. 結果

「看護の対象である人間を統一体として理解する能力」では、「下位項目1 生物体としての人体の構造と機能」が前年度の84%から100%に上昇している。過去5年間では84～100%を推移しており、高い評価を得ている。形態機能学の理解では、「下位項目2 人間の身体的・精神的・社会的・spiritualの統一体、個別性・独自性」「下位項目3 人間は基本的ニードを有し、環境と相互作用し生活している存在」では、3.3%(1名)の学生があまり身についていないと答えている。このことから、看護師国家試験を終了しても自己の能力に自信が持てない学生がいることが窺える。その他の「下位項目1 人体の構造と機能」「下位項目4 成長発達している存在」では前年度と同様、身についているが100%であった。

「専門的知識・クリティカルシンキング・科学的根拠に基づく技術を活用して安全かつ確実に看護実践できる能力」では、「下位項目1 健康問題を持つ人間の反応を理解」「下位項目3 看護過程を展開しながら健康上の課題に対応していく能力」「下位項目4 安全な看護を実践するために意思決定していく能力」が身についていると答え、前年度より3～10%上昇した。「下位項目2 科学的根拠に基づいた基礎的な看護技術」は、前年度と横ばいであった。

「人間および生命の尊厳と人権を擁護できる判断力と倫理的態度」では、前年度100%だったが、今年度は3.3%があまり身についていないと答えた。「下位項目2 倫理的判断に必要な基本的知識」「下位項目3 看護者としていかなるときも責任をもって倫理的判断・行動がとれる能力を身につけている」はいずれも100%であり、前年度から上昇した。

「人間関係を基盤におき、相互作用と相互成長できる感性」では、すべての項目において3～6%以上の上昇を認めた。

「保健医療福祉チームの一員としての看護の役割の理解、協働できる態度」では、「下位項目2 保健医療福祉における社会資源の理解」「下位項目3 対象に応じて適切な社会資源の選択、保健医療福祉チームの協働できる態度」ではすべてが前年度から3～19%上昇した。

「専門職業人として研鑽できる能力」では、「下位項目2 専門職業人としての自律性を持ち、主体的に学び続ける姿勢を有している」がすべて2～18%上昇した。しかし3.3%(1名)の学生が「あまり身についていない」と回答している。

2. 考察

「看護の対象である人間を統一体として理解する能力」は、本校では形態機能学を看護教員も教授しており、模型作成や実験を行っている。学年担当からの支援として毎月の形態機能学の小テストを実施する等、難解な内容を初学者でも理解しやすいようなサポートを行っている。学校祭でも形態機能学の学習発表をし、座学だけでなく自分で説明できるレベルを目指している。授業・臨地実習・教科外活動等を通し、他者理解・人体の構造と機能の強化を

行ってきたことと、学年毎に目標を定め、振り返りを行っていることで身についたものと考ええる。

「専門的知識・クリティカルシンキング・科学的根拠に基づく技術を活用して安全かつ確実に看護実践できる能力」は、授業では事例を積極的に活用し、シミュレーション教育やアクティブラーニングを導入し、看護研究の授業でも素朴な疑問から研究を始める等、論理的思考力・判断力の向上に努めている。また、臨地実習を通して科学的根拠とアセスメント能力の重要性に気づくことができている。普段から、教員から学生になぜ？と考えてもらう指導が功を奏していると考ええる。

「人間および生命の尊厳と人権を擁護できる判断力と倫理的態度」は、臨地実習での患者との関わりやカンファレンス等で、知識や技術だけでなく、対象を尊重し、責任をもつことの重要性を学ぶことができている。学年でも新聞記事をグループワークで討議・発表し、倫理的態度の学びを支援している。

「人間関係を基盤におき、相互作用と相互成長できる感性」は、授業でグループワーク等の参加型学習を多くしていることや、臨地実習での患者・看護師・他職種・教員・グループメンバーとの価値観の交流により培われている。今後も、他者と関わり、相手の立場になって考える機会を増やしていく。

「保健医療福祉チームの一員としての看護の役割を理解し、地域社会であらゆる職種と協働できる態度」は、これまで学生が苦手とするところであったが、臨地実習で多職種との連携の見学や、退院調整カンファレンスへの参加等を推進した結果、態度が身についたと答える学生が増加したと考える。また、実習以外の授業の一貫として障害者自立支援施設や特別養護老人ホームへの見学に行っていることも地域社会のあらゆる職種を知る機会となっている。超高齢社会の中で、今後も病院以外の施設や地域との連携が求められる。さらに保健医療福祉チームの一員としての看護師の役割を積極的に担える人材を育てていくためにも、参加や見学で留まらず、自分が今後どう協働していけるのかを考える機会を増やしていく必要がある。令和元年度から、2年次に専門職連携学習を取り入れ、理学療法の作業療法学科の大学生と交流を図っており、他職種連携の必要性を再認識する機会となった。

「広く社会に関心をもち、専門職業人として研鑽できる能力」は、これまで本校では主体性の育成を課題として取り組んできたが、学年での関わり、授業における参加型学習方法の定着等による成果の表れと考える。科目の中でもシミュレーション学習を取り入れ、受け身でなく自己で考え行動できる学生が増えてきたと考える。

カリキュラムに関する評価

「カリキュラム全体に関する満足度」では、基礎分野が前年度より 27%上昇し 90%である。自由意見から、看護との関連性が見出せない、授業が解りにくい等があがった。これは毎年挙がる内容であり、各科目の目的をさらにわかりやすく伝えていく必要がある。また、今年度から外部講師にも授業評価を実施し、結果を伝え、授業の質の向上に努めている。

専門基礎分野では、満足度が前年度より 10%上昇している。専門性の高い講師陣の講義に満足していることが窺える。

専門分野ⅠⅡでは、いずれも 6%上昇し、100%であり、高い満足度が得られている。校内の教員とのコミュニケーションが図れており、学生にきめ細かい指導ができていると考える。

統合分野では、6.6%が当てはまないと答えているが、前年度と比べると満足度は 6%上昇している。多重課題等の困難感はあるものの、場の設定等、対象の生活をイメージしやすい学習環境を整えたためと考える。

学校行事の満足度は 80%であり、前年度より 2%上昇している。これは、COVID-19 により行事が縮小され、制限がある中でも学生間の交流が図れたためと考える。学校の置かれている状況を理解し、教員陣の立場を考えた意見もあり、相手を思いやることができている。

教科外活動の満足度は、30%上昇している。これは、学生参加型の準備や、主体性を引き出す関わりの成果と考える。「自然と親しむ」では、卒業時になって看護との関連性や学びの価値に気づいたという意見があった。教科外活動の目的を改めて正しく伝え、振り返りやディスカッションで看護と結びつけて考えられる機会を設けていく必要がある。

「教育支援に関する評価」では、「下位項目 1 学習を支援するための視聴覚素材(DVD 等)は十分である」が前年度から 11%上昇した。形態機能学や事例学習で学校の視聴覚素材を利用する頻度が増えたためと考える。しかし「フィジコをもっと活用すればよかった」という自由意見もみられ、学校が保有する機材をより積極的に活用できるように教員も機材やモデルの機能により精通する必要がある。

「下位項目 2 演習室・フィジカルアセスメント演習室・実習室は利用しやすい仕組みになっている」の評価は、過去 4 年間にわたり伸び悩んでいたが、今回 20%上昇した。COVID-19 により集合型の技術練習時間が縮小したため、個人で実習前のイメージトレーニングに活用したためと考える。平常時でも実習室を気軽に目的意識をもって利用できるような工夫が必要である。

「下位項目 3 学生に対するサポートは利用可能で役に立つ」は、30%上昇し 90%と高評価である。進路相談やカウンセリング、教員やチューター制による手厚いサポートに対する評価と考える。今後も学生相談等、気軽に利用しやすいシステムやサポート体制を整えていく。

「下位目標 4 カリキュラム評価の機会」は 28%上昇しており、「下位目標 5 学生が近づきやすい存在」は、6%上昇していることから、学生と教員の信頼関係は概ね構築されていると考える。

「下位項目 6 全体的に見て本校を肯定的に捉えている」は 100%であり、過去 4 年間高水準を保っていることから、教育支援に対する評価が高いと捉える。自由意見から得られた要望に対しては、ニーズとして把握し、教育上必要な点に対しては検討していく。

「授業に関する評価」では、「下位項目 1 わかりやすい授業」「下位項目 2 教材研究がされている」「下位項目 3 専門的な知識」「下位項目 5 視野を広げるのに役立つ」「下位項目 6 授業要綱との連動」の満足度はいずれも 100%である。「下位項目 4 しっかり勉強しないと単位の取得が難しい授業がある」は前年度より 20%上昇し 93.3%である。学習への危機意識が定着したことが窺える。引き続き、本校の看護師国家試験合格率の高さに慢心すること

なく、低学年から単位取得・看護の基盤となる学習の必要性を認識してもらえるような投げかけが必要である。

学習への動機づけ・意欲

自由意見から、1年次の終わりに学習意欲が下降するが、もともとの看護師になりたいという思いや、患者との出会いにより継続して学ぶことができている。教員による臨床でのエピソードも印象に残っており、教育力により意欲に影響があることがわかった。早期から、学習のイメージづくりも必要である。縦割り技術評価は好評であるため、上級生との情報交換等を増やしていくことも検討する。

成績が低迷し、年度末に学年担当と教務主任に面接されたことで危機意識が高まったという意見もみられるため、学生の個性に合わせ、タイミングよく話をしていく。

チューター制度は好評であるため、低学年からも導入を検討していく。